

フーゴ・ヴォルフの初期歌曲群における様式的特徴(その2)

— 歌唱パートの同音反復を中心に —

梅林 郁子

1. 研究目的

本稿は、フーゴ・ヴォルフ Wolf, Hugo (1860-1903) の初期歌曲群における歌唱パートの同音反復と、梅林 1999 で明らかにした、その他の音楽的要素— 特徴的な歌唱旋律の形態、ハーモニー、ダイナミクス — の、年代別傾向を比較し、彼の創作期区分について検討するものである。

ヴォルフは、生涯に 314 曲の歌曲を残しているが、作曲を始めた 1875 年から 87 年までの約 13 年間に、そのうちの 87 曲を作曲した。これらの作品を、集中的な作曲活動が行われた 1888 年（盛期）の最初に作曲された歌曲集、《独唱とピアノのためのエドゥアルト・モーリケによる詩集 Gedichte von Eduard Mörike für eine Singstimme und Klavier》と比較すると、上述の三つの音楽的要素において、その変遷は、年代的に互いに類似の、四期の創作期に区分された（梅林 1999:51-53¹⁾）。

一方、彼の全歌曲には、特に歌唱旋律において同音反復が多用されるという、顕著な特徴が見られる（梅林 1999:41）。しかし、その初期歌曲群における用法や傾向と、他の音楽的要素との関わりは、これまで十分に論じられていない。そこで、本稿では、ヴォルフの全歌曲における同音反復の用法を整理した上で、初期歌曲群全 87 曲を対象に年代別の特徴を示し、他の三種の音楽的要素に拠る創作期区分との関わりと、その意味について考察を試みたい。

2. 同音反復の用法

2.1 分析の手順

前項で述べたように、ヴォルフの歌曲の歌唱パートには同音反復が多用されているが、その用法は様々であるため、楽曲分析を通じて細分化することが可能である。細分化にあたって、本論で用いる同音反復の分析、及び分類は、独自の方法を取るため、以下に説明する。

分析は、まず便宜上、一詩行一単位として分割を行った歌唱旋律を観察し²、そこに見られる同音反復が、詩との関わりから、言葉を強調するためにどのように機能するかについて、或いは言葉と直接的な関わりが見出されない場合、音楽面で果たす役割について着目する。そして彼の全歌曲において観察される全ての同音反復を抽出し、その使用法ごとに区分けを行う。しかし、この用法による分類は、各々使用頻度が大きく異なっているため、次項目で提示する分類は、彼の同音反復の用法のなかで、主となるもののみを扱いたい³。

2.2 同音反復の分類

特徴的な同音反復の用法としては、大きく次の3種類が挙げられる。

- [1] 同音反復内のいずれかの音が強調される形
- [2] 同音反復以外の音に強調点を作るための同音反復
- [3] 音階と関連する同音反復

まず [1] は、複数音から成る同音反復を、詩の言葉の強調との関連から分類したもので、同音反復の音数と強調部分により、更に次のように分けられる。

- [1] 同音反復内のいずれかの音が強調される形
 - ①三音以上から成る同音反復

②二音から成る同音反復

③他の音が挿入されることにより、同音反復内の一音が強調される形

④同音反復部分を、他と切り離すことにより強調する形

次に、〔2〕同音反復以外の音に強調点を作るための同音反復、の形について、述べたい。これも〔1〕と同様、詩の言葉の強調部分に基づき、同音反復を二種類に分類することができる。

〔2〕 同音反復以外の音に強調点を作るための同音反復

①同音反復の直後の音が強調される形

②同音反復に他の音が挿入されることにより、その挿入音が強調される形

ここまでに挙げた〔1〕と〔2〕の同音反復型は、強調点はその内部にあるか、外部にあるかの違いはあっても、詩の個々の語の強調や表現に深く関わっている。しかし、次の〔3〕音階と関連する同音反復、は詩の内容表現を表す場合か、音楽的に歌唱旋律の動きの一部として機能する場合、或いはその双方の役割を担うものである。ヴォルフにとって音階は、詩の内容表現と直接関連がなくても用いられる音楽語法の一つであり、それに同音反復が組み合わせられたものが、この〔3〕となる。そのため、多くは詩の内容表現と直接的な関係を見出すことが難しく、また、詩の解釈によっては、この型の同音反復が内容と関係しているかどうか、判断することが困難な場合も多い。そこで、次の分類は、語の強調や表現との関わりよりも、音階の方向性を焦点としてまとめている。

〔3〕 音階と関連する同音反復

①下降する音階と関連する同音反復

②上昇する音階と関連する同音反復

以上に提示した〔1〕～〔3〕の分類は、全て同音反復と他の音楽的特

徴（強弱、長短、前後の音程関係の変化や、音階との関連）の関係を基に行ったものである。つまり、同音反復自体は、同じ音の羅列に過ぎないが、これに関わる音楽的特徴により差異が生まれ、その変化が各分類を形作っていると言えよう。

3. 同音反復の傾向

この同音反復の主要な用法〔1〕～〔3〕について、1875～87年までの特徴をまとめると、その傾向は、数年を単位として括ることができる⁴。そこで以下に、複数年にわたって見られる傾向を、次の【表1】に示す。

【表1】1875～87年のリートにおける同音反復の傾向

分類 年(曲数)	〔1〕、〔2〕、〔3〕	〔1〕	〔2〕	〔3〕
1875(4)	・特徴の指摘が困難	・①の割合が ほぼ1/5で安定	・①のみ	・下降音階と 関連する同音反 復が60%前後
1876(17)			・②の使用 (徐々に減少)	
1877(7)	・〔1〕が半数前後、 〔2〕が1/4強、 〔3〕の減少	・①の割合が 約1/3に増加	・①のみ	・下降音階が 更に増加
1878(27)				
1879(3)				
1880(6)	・〔3〕の増加	・①の減少	・②の使用 (増加)	・上昇音階の 増加
1881(1)				
1882(4)	・〔2〕の増加	・①の増加	・①のみ	・下降音階の増加 →盛期との類似
1883(9)	・〔1〕の多用に対し、 〔2〕は少ない→盛期の 傾向と類似			
1884(1)	傾向と類似	・①が再度減少		・種類の増加 →盛期との類似
1886(3)				
1887(8)				

このように、各反復型の傾向も、また全体としての傾向も、五段階にわたる変化を遂げて、1888年のリートにつながっていることが指摘できる。そしてこの段階的な変化は、それぞれ変化する年が異なっているが、大きくまとめると、1875～78年前後までを第1期、78年前後～83年、または84年までを第2期、以後87年までを第3期と括することも可能である。この時期区分は、88年に向けた、同音反復の順序だった発達を表

すものではない。しかし、概ね第1期ではヴォルフ的な同音反復の特徴の萌芽が観察され、第2期においては様々な用法が試されることで、次の時期につながっている。そして、第3期では全体として、1888年以降の特徴に近づきつつあると言えよう。

4. 初期歌曲群における創作期傾向

この同音反復の区分を、既に同じ初期歌曲群において明らかとした、特徴的な歌唱旋律の形態や、和声、ダイナミクスの三つの音楽的要素における創作期傾向（梅林 1999:51-53）と比較したい。

この三つの音楽的要素の様式的特徴は、それぞれ四期に年代区分することができた。第1期は1875～77年（ダイナミクスのみ76年まで）、第2期は1878～79年（ダイナミクスは77～78年）、第3期は1880～84年（ダイナミクスは79年から）、第4期は1884～87年までである。この創作期区分では、概ね第1期が習作期、第2期は歌唱旋律において、盛期のヴォルフ作品に観察される特徴が見られる。そして第3期では、特徴的な歌唱旋律の使用は減少しているが、調性構造とダイナミクスにおいて、盛期作品の特徴が観察され、第4期では逆に、歌唱旋律においては盛期的な特徴が観察されるのに対し、調性とダイナミクスにおいては、試行錯誤的な取り扱いがなされていた。

これを同音反復の三期の区分と比較すると、時期的に第1期はほぼ重なり、同音反復の第2期が三つの音楽的要素の第2期及び第3期に、同音反復の第3期が三つの音楽的要素の第4期とほぼ同じとなる。つまり、同音反復の第2期が三つの音楽的要素において、二つに分かれる以外、ほぼ同じ年代区分となるのである。一方、その内容を見ると、第1期はどちらも習作期と捉えられるが、同音反復の第2期にあたる時期は、同

音反復の用法と共に、三つの音楽的要素も様々な手法を試み、ヴォルフが盛期に向かい、多様な音楽語法を試用している様子が窺える。そして同音反復の第3期では、同音反復も含めて、歌唱旋律においては盛期作品とほぼ同じ傾向が見られることから、ほぼ盛期の状態が確立しているが、調性とダイナミクスでは、盛期に向けてまだ調整が続けられているのである。

5. まとめ

本稿では、ヴォルフの初期歌曲群の、歌唱パートにおける同音反復を、大きく〔1〕同音反復内のいずれかの音が強調される形、〔2〕同音反復以外の音に強調点を作るための同音反復、〔3〕音階と関連する同音反復の三種類に分類し、その特徴と年代別傾向を明らかにした上で、特徴的な歌唱旋律、調性、ダイナミクスの三つの音楽的要素における創作期区分との比較検討を行ってきた。

その結果として、これまでヴォルフの初期歌曲群の様式的特徴における創作期区分を、三つの音楽的要素の特徴から、全四期に分けていたが、同音反復の観点を含めると、第1期：習作期（1875～78年前後）、第2期：試行期（第1部：78年前後～79年前後、第2部：79年前後～83年、または84年）、第3期：確立期、または移行期（以後87年まで）という形で、第2期を二部分に分けた形で広く捉えることが可能である。また現時点で、第3期は、歌唱旋律においては確立期、ダイナミクスや調性においては盛期への移行期と捉えられる。しかし、更に他の音楽的特徴から、初期歌曲群の変遷を捉えることによって、彼の創作期区分は、より明確、かつ詳細なものになるであろう。今後の課題として検討を進めたい。

註

- 1) 梅林 1999 では、88 年の 2 曲も初期歌曲群に含めたが、その後の検討により、今回はこの 2 曲を盛期の作品と考え、考察の対象に含めない。
- 2) 必要に応じて、詩の複数行にわたる反復にも応用される。
- 3) 同音反復の全用法、及び全用例については、梅林 2001:68-78 を参照されたい。
- 4) この表の基となるデータは、〔1〕、〔2〕、〔3〕全体の使用傾向については【図 1】、〔1〕～〔3〕の各数値については【表 2】に示す。

引用・参考文献(著者アルファベット順)

EGGER, Rita

1963 *Die Deklamationsrhythmik Hugo Wolfs in historischer Sicht.*
Tutzing:Hans Schneider.

SAMS, Eric サムズ・エリック

1980 “Wolf, Hugo(Filipp Jakob)” . In *The new Grove dictionary of music and musicians*, ed. SADIE, Stanley. 20:475-502. London:Macmillan.

1994 (邦訳) ヴォルフ・フーゴ (フィリップ・ヤーコブ)」。井形 ちづる訳
『ニューグローブ世界音楽大事典』柴田南雄；遠山一行総監修，3:48-71.
東京：講談社.

THÜRMER, Helmut

1970 *Die Melodik in den Liedern von Hugo Wolf.* Giebing, Chiemsee:
Emil Katzbichler.

梅林 郁子

1999 「フーゴ・ヴォルフの初期歌曲群における様式的特徴」『お茶の水音楽論集』1:36-55.

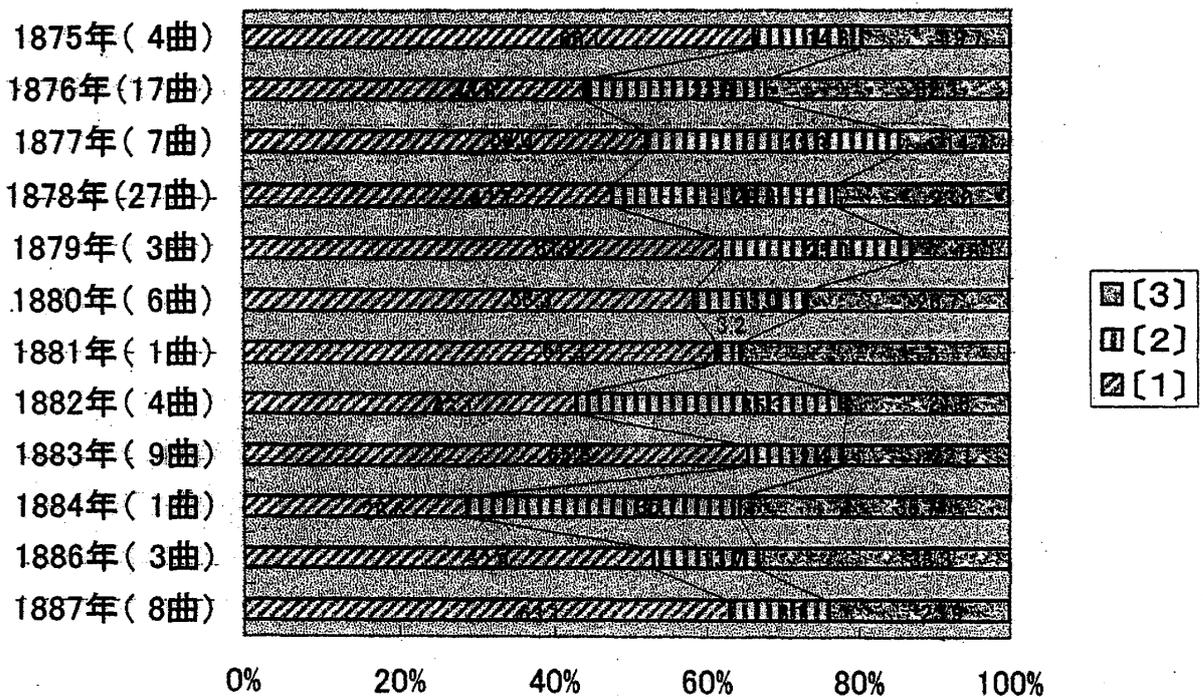
2001 「フーゴ・ヴォルフのリートにおける朗唱性に関する研究 —歌唱旋律

における同音反復を中心に」。お茶の水女子大学大学院博士論文(甲172)。

うめばやし いくこ

国立音楽大学卒業。お茶の水女子大学大学院終了。博士(人文科学)。現在、お茶の水女子大学音楽表現講座教務補佐員。主要論文：『フーゴ・ヴォルフのリートにおける朗唱性に関する研究 — 歌唱旋律における同音反復を中心に』(お茶の水女子大学大学院博士論文〔2001年〕)、
「ヴォルフ作曲《アイヒェンドルフ歌曲集》における反復の役割」(『人間文化論叢』第1巻〔1999年〕：23-34)。

【図1】[1]、[2]、[3]の使用傾向



【表2】 [1]、[2]、[3]の内訳

分類 年(曲数)	[1]					[2]			[3]		
	①	②	③	④	計	①	②	計	①	②	計
1875(4)	8	28	1	0	37	8	0	8	7	4	11
1876(14)	11	46	0	0	57	28	3	31	24	18	42
1877(7)	11	42	0	0	53	33	1	34	8	7	15
1878(27)	92	150	0	1	243	148	1	149	67	50	117
1879(3)	17	35	0	0	52	21	0	21	8	3	11
1880(6)	23	46	0	1	70	18	0	18	22	10	32
1881(1)	3	16	0	0	19	1	0	1	5	6	11
1882(4)	4	17	0	1	22	17	1	18	4	7	11
1883(9)	53	110	0	0	163	28	3	31	46	9	55
1884(1)	2	2	0	0	4	6	0	6	1	4	5
1886(3)	7	20	0	0	27	7	0	7	11	6	17
1887(8)	25	86	0	0	111	23	0	23	22	20	42
計(87)	256	598	0	0	858	338	9	347	225	144	369

註：この表は、同音反復の用いられている個所を1つと数えているが、一箇所でも複数の機能を有するものは、複数の分類に含めている。つまり、集計は「のべ数」の形を取っている。